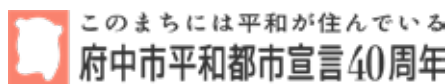


関係各位

2026 年 7 月 1 日
府中市郷土の森博物館



企画展

発掘された 戦争の記憶

7 月 18 日（土）～ 10 月 25 日（日）

会期中の休館日：月曜日（祝日の場合は翌平日）

今年は、府中市平和都市宣言 40 年！

府中市は 1986 年に平和都市を宣言しました。それから 40 年という節目の年（2026 年）をとらえ、本展を開催します。調布飛行場の近くに現存する、戦闘機・飛燕を隠した掩体壕を観察することを入口にして、府中市域で発掘されたさまざまなモノを軸にして、戦時の記憶をよみがえらせます。

掩体壕とは何か？

掩体壕は、戦闘機を空爆から守るためにつくられたシェルターで、調布飛行場の付近にたくさん造られました。「旧陸軍調布飛行場白糸台掩体壕」は、数少なくなった現存する掩体壕の一つで、発掘を含むさまざまな調査を経て、府中市の史跡に指定されています。調査で明らかになった、掩体壕の構造を通して、戦争末期の様相を探ります。

発掘される戦時の暮らし

府中は、古代国府が置かれた歴史のあるまちで、発掘調査を精力的に実施してきました。こうした発掘調査では、明治時代以降のさまざまなモノも出土しています。これらのモノを通して、誰がどこで戦ったのか、くらしはどう変わったのか、といった側面を明らかにします。

出土したモノが語る敗戦

府中市内の発掘では、銃身を捻じ曲げて廃棄された小銃や軍刀も出土しています。進駐軍の命令か、あるいはそれに備えてのことなのでしょう。



●史跡整備された掩体壕

戦闘機・飛燕を空爆から護るためにつくられた。同様のものは 30 基ほどつくられたが、現存するのはわずか 4 基。



●焼き物の缶詰容器

戦況が悪化して金属が軍需優先となるなか、缶詰までもが焼き物になった。〔武蔵台出土〕



●捨てられた小銃と銃剣

アメリカ軍の指示で回収され、廃棄されたものらしい。〔日鋼町出土〕

特別公開 | 百式司令部偵察機の尾翼

2021 年、百式司令部偵察機の尾翼が市内の個人宅で発見されました。同機は陸軍の主力偵察機で、乗員 2 名で調布飛行場を飛び立ち、片道 4 時間をかけてサイパン島まで飛行し、アメリカ軍の動向などを探っていたといわれます。現在実物は英国王立空軍博物館に残されているだけですので、大変貴重です。本館収蔵後、はじめてお披露目します。



● 偵察機の尾翼

右水平尾翼。長さ 2.29m。ジュラルミン製の骨組みにアルミ合金が貼り付けられています。

展示会開催の趣旨

調布飛行場にほど近い市内白糸台^{しらいとだい}に、奇妙なコンクリートの建造物があります。アジア太平洋戦争の末期に、戦闘機・飛燕^{ひえん}を空襲から護るために建造された掩体壕—エンタイゴウ—です。こうした戦時下の建造物は考古学の調査・研究の対象として近年、注目されています。実体験者の証言やさまざまな記録とともに、当時の様子を知るうえでの重要な資料として認識が高まってきているのです。

戦後 80 年を経過した現在、戦争の体験者や戦時下のくらしの体験者が少なくなっていることはいうまでもありません。郷土の森博物館では戦争に関わるモノの収集にも努めていますが、年月の経過とともに関連するモノは少なくなっています。いつのまにか失われているのでしょうか。

その一方、発掘調査によって戦時の遺構や遺物が見つかることは決して珍しいことではありません。戦時のモノが地中に埋もれているのです。

府中市は 1986 年に平和都市を宣言しました。それから 40 年という節目の年をとらえ、本展を開催することとしました。掩体壕を観察することを入口にして、府中市域で発掘されたさまざまなモノを軸にして、戦時の記憶をよみがえらせる試みです。戦場に駆り出されたのがだれで、どこで戦ったのか、それを支えた人びとのくらしぶり、そして終戦直後の様子にも目を向けてみます。

モノをみつめ、声なき声に耳を傾け、平和への誓いを新たにする機会となることを願っています。

展示資料

府中市内遺跡出土品など

総数約 40 件、約 80 点

開館時間 9 : 00 ~ 17 : 00 (入場は 16 : 00 まで)

観覧料 博物館入場料でご覧いただけます。

博物館入場料 大人 : 300 円、子供 150 円、4 歳未満無料

主催 府中市・府中市郷土の森博物館

本件に関する問い合わせ

府中市郷土の森博物館

学芸係広報担当

〒183-0026 東京都府中市南町 6-32

TEL042-368-7921

kyodo-no-mori@msi.biglobe.ne.jp